

お別れの前後

— 北原文雄追悼

文芸評論家（横浜市）

勝又 浩

これは、かつて北原さんも書かれた神戸新聞の名物コラム「随想」欄の一回分だが、記念の意味でここに再録することをお許し願いたい。

本紙にも報じられていたが、去る九月四日、「淡路島文学」主宰の北原文雄さんが急逝された。七一歳とはいかにも若かった。会えば地域の文化活動に忙殺される身を嘆いていたが、それは私が話の矛先を彼に期待している小説に向けるからでもあった。淡路島に関わる歴史小説など、まだ実現していないテーマを幾つも聞いていたからだ。

年余務めた小松伸六さん、彼は大学では独文の先生だったが、ドイツに行ったとき同人雑誌というものが通じない、理解されなくて驚いたと書いている。ヨーロッパでは、個人が雑誌を出すことはあっても、集まって共同で発表の場を作るといようなことは考えられないのだという。

彼とは、会合などの後、二人だけになったようなときは自然に同人雑誌が話題になったが、そうしたときも私が言ったことの一つに、同人雑誌は日本独自の文化だからね、という一条があった。日本では高校生でも知っている同人雑誌という制度、それはほとんどの人が意識もしていないが、実は世界でも日本だけが持つ特異な文化なのだ。

ではなぜ日本にこういう制度ができ、広く受け入れられているのか。それは要するに短歌俳句の結社の伝統、もっと大きく言うと古代の歌垣や歌合せ、そうした「参加型文芸」の伝統を持つ文化が、近代になって小説の世界にもすんなりと入り込んだからなのである。

彼とはこんな話ができただが……。

（「日本文化としての同人雑誌」神戸新聞 平成二八年一月二五日夕刊）

たとえば「文学界」の同人雑誌評を二〇

横浜に住む私が「神戸新聞」に書くことになったきっかけは、この年三月、私が姫路市の「和辻哲郎文化賞」を戴いて神戸との縁ができたからであった。そして実は、その授賞式に北原さんがご夫妻で来てくださった。式が終わったら食事でもしようと言っていたのだが、当日は市の設定したプログラムが夜まであってとうとうお話しする時間がなかった。授賞式などは大概パーティーがつきものだが、和辻賞の場合は阪神淡路大震災の年にパーティーを廃止して、以来そのままなのだそうだった。

それで当日はとうとうご挨拶する時間もなかったのだが、この日のことを北原さんは「淡路島文学」一二号の小説「朝の夢」に書いていて、それが彼の小説としては最期の作品となってしまった。やはり小説を書く先輩、下澤勝井さんが、君のことを書いたのが絶筆になったね、と後に言われるような次第となった。

「淡路島文学」第13号「北原文雄追悼特集の巻」平成28年10月